

## 【研究ノート】

# 大学生のダンス授業に対する 主観的学習評価の性差の検証

## —男女共修授業を対象として—

Sexual differences in subjective learning evaluations of  
university student dance lessons  
Students in co-educational classes

田 中 望\*

Nozomi TANAKA

キーワード：ダンス、男女共修授業、性差

Keyword: dance, co-educational classes, sexual differences

### 要旨

本研究ではダンス指導ができる教員養成に対する知見を得るために、保健体育科教員養成課程に在籍する学生における男女共修ダンス授業受講後の主観的学習評価の性差を検討した。3年次に開講された保健体育科教育法(ダンス)を履修した学生99名(男子59名、女子40名)に授業を受講した上での主観的な学習評価を問う39項目のアンケート調査を実施した。39の質問項目における因子構造の男女差を検証するために探索的因子分析を行った。因子分析の結果、男女ともに5つの因子構造が示された。男子では「踊ることの基本」や「運動感覚」と解釈される因子が抽出された。このような因子構造は女子にはみられず、このようなダンスの運動的側面に関する因子構造は、男子特有のものと推察された。一方女子では抽出された因子はすべてダンスの授業実施につながる視点で構成されていた。したがって、本研究においては、女子において、自身が授業担当者になることをよりイメージしていたことが推察される。しかし、本研究で得られた結果が、ダンス授業にみられる特有の傾向かは今後も継続した検討が必要である。

### Abstract

In this study, with the aim of obtaining findings for training of teachers who can give dance instruction, we examined sexual differences in subjective learning evaluations following co-educational dance classes for students in a physical education teachers training program.

---

\* 東海学園大学スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科

A questionnaire survey with 39 questions on subjective learning evaluation was given to 99 students (59 males, 40 females) after they had completed a class on teaching methods in physical education (dance) for third-year students. An exploratory factor analysis was conducted to examine differences between male and female students in factor structure for the 39 questions. The results of the exploratory factor analysis showed a factor structure with five factors in both males and females. For males, the factors identified in the factor structure could be interpreted as “dance fundamentals” and “kinesthesia.” This kind of factor structure was not seen in females, and a factor structure related to the movement aspects of dance may be characteristic of males. In females, all the identified factors were from perspectives linked to teaching the dance lesson. Therefore, it is conjectured that the females in this study had a stronger image of themselves as the person in charge of a class. However, the results obtained in this study need to be investigated further to determine whether this is a trend specific to dance classes.

## 1. 緒言

学校体育におけるダンスは、明治5年の学生発布以来120年近く小学校を除くと女子のみが行ってきた(高橋、2008)。しかし、平成元年の学習指導要領の改訂により女子必修から男女共修の選択制が導入され、さらに平成10年の学習指導要領の改訂ではこれまでに行われてきた「創作ダンス」「フォークダンス」に加えて、「現代的なリズムのダンス」が導入された。そして、周知のとおり、平成20年改訂、平成24年全面実施の現行学習指導要領により、中学1、2年生の男女でダンス必修化が決定された。村田(2008)は、ダンス学習の特徴は「心身の開放」と「身体的コミュニケーション」であるとし、“ゴールフリー”な探求型・遠心型学習を基本として、「今、ここ」から始まって常に生み出していく学習(課題解決学習)が原点になると述べている。そして、ダンス学習は人と人、人と運動とのかかわりを生み出す学習の典型であり、現行学習指導要領において重要視されている「習得・活用・探求」の授業を展開しやすい領域であることを示している。

学校体育におけるダンス学習が時代の要請に応えるべく工夫が重ねられ変遷してきた一方で、伊藤ら(2000)はダンスの学習内容が創造的・芸術的であるために指導が難しく、多くの現場教員がダンス授業に苦手意識を持っていると指摘している。この背景として、ダンス授業に掲げられた理想に対して授業方法論の確立が遅れたこと(吉川、1996)が考えられる。また、中村(2009)は、現職教員におけるダンス男女必修化への評価は肯定へ転じていることを明らかにしたうえで、ダンス授業への否定的評価の理由として、指導力不足、指導体制の不備など教師側の問題が多いことを指摘した。同様に教員の知識不足、技能不足、また、参考資料の不足などを指摘する報告はいくつかなされている(松本ら、2013、山崎、2013)。

教員自身のダンス履修経験の有無が授業実施への苦手意識に影響することも指摘されている(山崎, 2013)。ダンスの履修経験については、男性教員が女性教員より圧倒的に少ないと予想される。これは男性教員がダンス授業を実施する際の障害になると考えられ、実際にダンス指導に関して男性教員が女性教員よりもネガティブな意識傾向を持つと報告されている(茅野, 2013、熊谷, 2014)。しかし、これからの教育現場でのダンス授業の要請には男性教員も女性教員と同等に応えていかなければならないであろう。

保健体育教員養成大学におけるダンスの授業では、学生の技能とその教授方法および授業計画の立案、実施に関する技術などを限られた時間の中で効率よく身につけさせる必要がある。木山(2014)によれば、教員養成課程のダンス授業における学生の形成的授業評価において、12回の授業のほとんどで女子が男子よりも高い自己評価をしていることが示されている。しかし、実際にどのような内容でどのように性差が現れているか詳細については触れられていない。また、ダンス指導ができる保健体育教員をいかに養成するかという視点については研究が十分になされていない。

そこで、本研究ではダンス授業を受講した学生が行う主観的な学習評価にどのような性差が表れるかを検討することを目的とした。本研究では保健体育教員養成課程の授業科目「保健体育科教育法(ダンス)」を事例に取り上げ、報告する。

## 2. 方法

### 2-1 対象

T大学において3年次春学期に開講された保健体育科教育法(ダンス)を履修した学生99名(男子59名、女子40名)を調査対象者とした。履修クラスは3クラス(abクラス38名、cdクラス28名、efクラス37名)であり、全てのクラスが男女共修であった。なお、対象者は1年次より教職課程における教職に関する科目および教科に関する科目を履修している。ダンスについては3年次の保健体育科教育法(ダンス)が大学で初めて受けるダンスの授業となる。本研究の対象となった学生のうち、男子はこれまでに一度もダンス授業を受講したことがない者がほとんどであった。女子は多くが中学、高校でダンスの授業を受けていた。また、授業以外でダンスを専門的に行ったことがあるもしくは行っている学生は男女とも1割に満たない集団であった。その一方で、男女ともに学校行事の中でのダンスを経験したことがある者は多かった。対象者には事前に調査の目的、プライバシーの保護、倫理的配慮について説明し調査への協力を得た。

### 2-2 調査内容、調査時期

松本(2013)が現職教員を対象にダンスの実技研修の際に使用した調査項目を参考に本研究対象者に合わせた調査用紙を自作した。調査の内容はダンス授業を受講した上での主観的な学習評価

を問うもので、「楽しさ・面白さの体験」尺度（質問項目：6）、「なるほど・わかった」尺度（質問項目：10）、「身に付いた」尺度（質問項目：16）、「授業実施への不安」尺度（質問項目：7）であった。すべての評価項目がダンスの学習活動を通して理解され、知識、態度もしくは技能として習得されることが望まれる項目である。

回答方法は「楽しさ・面白さの体験」尺度では、「以下の項目においてダンス学習の「楽しさ・面白さ」を感じることができましたか」と問い、各質問項目に対して「そう思う」（第5水準）～「そう思わない」（第1水準）の5段階尺度の中から最もあてはまる番号を選択する方法であった。「なるほど・わかった」尺度では、「以下の項目においてダンス学習の「楽しさ・おもしろさ」を感じることができましたか」、「身に付いた」尺度では、「以下のダンス学習の項目について「身に付いた」と感じることができましたか」とした。「授業実施への不安」については、「ダンス授業に対する不安についてお伺いします」と問い、不安を持っているかについて「そう思う」（第5水準）～「そう思わない」（第1水準）からあてはまるものを回答させた。

調査は最終回の授業終了時に配布し、その場で回答させ回収した。

### 2-3 授業内容

本授業の基本的な計画は、全国ダンス・表現運動授業研究会(2011)においてその有効性が検証されてきた内容・方法に基づいたものであった。授業は、第1回～第7回は現代的なリズムのダンス、第8回～第11回は創作ダンス、第12～15回は模擬授業で構成された。現代的なリズムのダンス、創作ダンスいずれの領域においてもダンスの全体活動である「踊る」「創る」「観る」活動を取り入れた。

現代的なリズムのダンスにおける基本的な1時間の構成は、①ダンスウォームアップ②課題の確認③課題を動く④グループで教え合う⑤みんなで踊るという構成であり、「踊る」活動が主であった。そこで、課題曲に対するグループ作品創作と発表会を活動に取り入れ、「創る」「観る」活動を体験させるようにした。創作ダンスの基本的な1時間の構成は、①ダンスウォームアップ②課題の確認③課題を動く④グループでイメージを出し合う⑤小作品にまとめる⑥発表と鑑賞という構成であった。創作ダンスでは1時間の中に「踊る」「創る」「観る」活動を組み込んだ授業内容を主とした。第12回～第15回は学生が現代的なリズムのダンスもしくは創作ダンスから1つの教材を取り上げて指導案を作成し、グループ形式で模擬授業を行った。それぞれの内容における授業の学習形態は表1に示すとおりである。なお、グループ決定の際には教員がクラスにおける教材への理解度、学生同士のコミュニケーションの状態を鑑みてグループの形態（男子のみ、女子のみ、男女混合）を提案し、それに基づきグループを編成して活動した。

表1 授業内容とそれに対応する学習形態

現代的なリズムのダンス	
内容	学習形態
①ダンスウォームアップ	一斉、ペア (男子・男子、女子・女子、男子・女子)
②課題の確認	グループ：1回ごとに異なるグループ (男子のみ、女子のみ、男女混合)
③課題を動く	
④グループで教え合う	
⑤みんなで踊る	グループ、クラス全体
グループ作品創作	グループ (男子のみ、女子のみ、男女混合)
創作ダンス	
内容	学習形態
①ダンスウォームアップ	一斉、ペア (男子・男子、女子・女子、男子・女子)
②課題の確認	グループ：1回ごとに異なるグループ (男子のみ、女子のみ、男女混合)
③課題を動く	
④グループでイメージを出し合う	
⑤小作品にまとめる	グループ、クラス全体
⑥発表と鑑賞	
模擬授業	
内容	学習形態
1つの教材 導入～展開まで(15分)	グループ (男子のみ、女子のみ、男女混合)

## 2-4 分析の方法

5段階尺度による回答水準に5～1の得点を与え数量化し、それぞれの評価項目に対する平均値と標準偏差を算出し男女の比較を行った。また、39の評価項目の因子構造における男女差を検証するために探索的因子分析を行った。因子分析にはエクセル統計2015を使用した。統計的有意水準はすべて危険率5%未満とした。

## 3. 結果

### 3-1 各評価項目における男女差

表2はダンス授業受講後の主観的学習評価39項目の平均値と標準偏差を示したものである。

各尺度の回答平均値と標準偏差をみると、「楽しさ・面白さの体験」尺度、「なるほど・わかった」尺度、「身に付いた」尺度評価では、ほとんどの項目で女子の方が男子よりも高くなった。一方で、「授業実施への不安」尺度では不安に対してはすべての項目で男子が女子よりも高い値となった。

それぞれの評価項目での男女差については、男女の平均値差はほとんどの項目で0.2以内になっていた。そこで、平均値が0.2以上離れた項目について検討した。「楽しさ・面白さの体験」尺度の「5. 自分で考え自由に表現できる」、「6. いろいろな表現がみられる」、「なるほど・わかった」尺度の「8. 身近なものがダンスの教材になる」、「14. 先生が楽しそうにやっていると生徒も

楽しくできる」、「身に付いた」尺度の「20. 仲間と呼吸を合わせて踊ることができる」、「25. 誰とでも気軽にしかかわる」、「29. 学習の課題とその進め方を理解している」について、男女で0.2以上の平均値差が見られ、すべての項目で女子の評価が高くなった。

一方で、「9. ダンス授業の進め方」、「12. 繰り返し動いているうちに「恥ずかしい」という気持ちがなくなる」では平均値差0.15以上で男子が女子よりも高い評価をした。「16. 行き詰った時にはとりあえず動いてみると良い考えが生まれる」、「23. 関心を持ってダンスのことを知ろうとする」でもわずかであるが男子の方が高い評価になった。

表2 各評価項目における平均値と標準偏差

	男子		女子		平均値差
	平均値	SD	平均値	SD	
<b>楽しさ・面白さの体験 尺度</b>					
1.全身を使って体を動かすこと	4.42	± 0.67	4.60	± 0.49	0.18
2.みんなで協力してやり遂げることができる	4.47	± 0.62	4.53	± 0.55	0.06
3.いろいろな人と触れ合うことができる	4.47	± 0.65	4.55	± 0.59	0.08
4.踊っているうちに気持ちが開放的になる	4.24	± 0.70	4.30	± 0.75	0.06
5.自分で考え自由に表現できる	3.93	± 0.90	4.18	± 0.77	<b>0.25</b>
6.いろいろな表現がみられる	4.20	± 0.68	4.43	± 0.63	<b>0.23</b>
<b>なるほど・わかった 尺度</b>					
7.簡単な動きでもダンスになる	4.61	± 0.58	4.65	± 0.48	0.04
8.身近なものがダンスの教材になる	4.31	± 0.83	4.58	± 0.63	<b>0.27</b>
9.ダンス授業の活動の進め方	4.24	± 0.70	4.08	± 0.82	0.16
10.様々な学習課題があり、効果的な進め方がある	4.20	± 0.78	4.20	± 0.68	0.00
11.動きにメリハリをつけることでよりダンスらしい動き方になる	4.54	± 0.65	4.63	± 0.58	0.09
12.繰り返し活動しているうちに「恥ずかしい」という気持ちがなくなる	4.19	± 0.82	4.00	± 0.81	0.19
13.思っていたより運動量が多く、全身の筋肉を使う	4.25	± 0.86	4.28	± 0.81	0.03
14.先生が楽しそうにやっていると生徒も楽しくできる	4.39	± 0.69	4.63	± 0.53	<b>0.24</b>
15.アイデアを出し合うとおもしろい表現ができる	4.46	± 0.67	4.50	± 0.55	0.04
16.行き詰った時にはとりあえず動いてみると良い考えが生まれる	4.19	± 0.98	4.13	± 0.81	0.06
<b>身に付いた 尺度</b>					
17.自分なりのイメージにふさわしい動きで表現できる	3.83	± 0.78	3.85	± 0.73	0.02
18.精一杯に体を動かして表現できる	4.17	± 0.76	4.35	± 0.61	0.18
19.動きの特徴を捉えて、感情をこめて踊ることができる	3.81	± 0.81	3.85	± 0.65	0.04
20.仲間と呼吸を合わせて踊ることができる	4.02	± 0.85	4.35	± 0.48	<b>0.33</b>
21.楽しんで活動する	4.49	± 0.67	4.65	± 0.53	0.16
22.恥ずかしがらずに踊る	3.85	± 1.02	3.88	± 0.81	0.03
23.関心を持ってダンスのことを知ろうとする	4.02	± 0.83	3.98	± 0.82	0.04
24.課題やテーマに集中して取り組む	3.95	± 0.87	4.13	± 0.68	0.18
25.誰とでも気軽にしかかわる	4.08	± 0.91	4.33	± 0.69	<b>0.25</b>
26.努力してアイデアを出し合う	4.05	± 0.83	4.20	± 0.68	0.15
27.自分や仲間の良さを認めもらう	4.24	± 0.83	4.35	± 0.61	0.11
28.自分の役割や学習上の約束を守る	4.20	± 0.73	4.35	± 0.57	0.15
29.学習の課題とその進め方を理解している	3.95	± 0.75	4.15	± 0.61	<b>0.20</b>
30.思い浮かんだイメージや動きをすぐ踊って確かめる	3.78	± 0.97	3.93	± 0.79	0.15
31.良い表現になるよう工夫する	4.14	± 0.81	4.15	± 0.61	0.01
32.良い動きや表現を感じ取り、共感する	4.15	± 0.78	4.28	± 0.55	0.13
<b>授業実施への不安 尺度</b>					
33.まだダンス授業をどのように行ったらよいかわからない	3.98	± 1.00	3.58	± 1.05	<b>0.40</b>
34.単元全体の授業ができるか	3.92	± 1.01	3.70	± 1.08	<b>0.22</b>
35.単元全体を組み立てられるか	3.97	± 1.05	3.75	± 1.04	<b>0.22</b>
36.生徒がうまく動いてくれるか	3.86	± 1.13	3.85	± 0.82	0.01
37.異性の生徒への指導	3.39	± 1.19	3.05	± 1.18	<b>0.34</b>
38.生徒に対する助言や言葉がけ	3.66	± 1.23	3.05	± 1.14	<b>0.61</b>
39.自分が踊れないことへの不安	4.05	± 1.10	3.73	± 1.00	<b>0.32</b>



### 3-4 男女における主観的学習評価構造の違い

ダンス授業受講後の主観的学習評価 39 項目に対して主因子法による探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子解釈の可能性から 5 因子解を採用し、再度、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。因子負荷量が .4 に満たない項目は除外し、主因子法・Promax 回転による因子分析を繰り返し行った。最終的な因子パターンおよび因子間相関を表 3-1、3-2 に示した。男子においては回転前の 5 因子で 34 項目の全分散を説明する割合は 53.23%であった。同様に女子では 28 項目の全分散を説明する割合は 57.21%であった。

男子における第Ⅰ因子は 11 項目で構成されており、ダンスの特性である心身の開放や身体的コミュニケーションに関わる内容が高い負荷量を示した。そこでこの因子を「踊ることの基本」因子とした。第Ⅱ因子は学生自身が授業実施を想定した場合に不安を抱く内容が高い負荷量を示した。第Ⅱ因子に含まれる評価項目は質問紙における授業実施への不安尺度項目と重複するため、これらの因子は「授業実施への不安」因子とした。第Ⅲ因子は 10 項目で構成されており、踊り方への理解、学習題や教材への理解、ダンス授業での具体的な実践手法についての内容が高い負荷量を示した。そこで、これらを「授業実施への手立て」因子とした。第Ⅳ因子は 4 項目で構成され、ダンス動作の基礎的理解と良い表現を引き出すための視点に関する内容が高い負荷量を示した。そこでこれらの因子を「ダンス表現の手立て」因子とした。第Ⅴ因子は 2 項目で構成され、ダンスにおける身体活動の積み重ねにより理解が促進される内容が高い負荷量を示したため、「運動感覚」因子とした。

女子では、第Ⅰ因子は 6 項目で構成され、学生自身が授業実施を想定した場合に不安を抱く内容が高い負荷量を示した。男子と同様に第Ⅱ因子に含まれる評価項目は質問紙における授業実施への不安尺度項目と重複するものであったため、これらの因子は「授業実施への不安」因子とした。第Ⅱ因子は 6 項目で構成され、運動的視点、授業における学習課題や活動の進め方、コミュニケーションの視点などダンス授業実施ために理解が必要となる内容について高い負荷量を示した。そこでこれらの因子を「授業構成の基本的知識」とした。第Ⅲ因子は 5 項目で構成され、授業を受講する際の態度についての内容が高い負荷量を示したことから、「より良い授業への態度」因子とした。第Ⅳ因子は、ダンスの根本的な特性である自由な表現や心身の開放、身体的コミュニケーションに対する理解についての内容が高い負荷量を示した。そこで、これらの因子を「原初的な身体表現の理解」因子とした。第Ⅴ因子は 6 項目で構成され、表現の仕方に対する理解についての内容が高い負荷量を示したことから、「表現の理解と探求」因子とした。

表3-1 ダンス授業に対する男子学生の主観的学習評価の因子構造

	項目	因子					共通性
		I	II	III	IV	V	
踊ることの基本	4. 踊っているうちに気持ちが開放的になる	0.95	-0.06	-0.29	-0.14	0.16	0.78
	25. 誰とでも気軽にかかわる	0.70	-0.19	0.24	-0.08	0.05	0.69
	2. みんなで協力してやり遂げることができる	0.67	0.00	0.17	-0.16	-0.03	0.54
	3. いろいろな人と触れ合うことができる	0.61	0.01	0.12	0.12	-0.23	0.48
	26. 努力してアイデアを出し合う	0.55	0.06	0.13	-0.05	0.20	0.49
	27. 自分や仲間の良さを認めてもらう	0.54	0.14	0.18	0.26	0.02	0.63
	1. 全身を使って体を動かすこと	0.51	0.24	-0.08	0.15	0.05	0.40
	21. 楽しんで活動する	0.49	-0.02	0.25	0.36	0.06	0.69
	5. 自分で考え自由に表現できる	0.46	-0.03	0.27	-0.13	0.29	0.56
22. 恥ずかしがらずに踊る	0.42	0.14	-0.16	0.16	0.39	0.44	
9. ダンス授業の活動の進め方	0.42	-0.03	-0.03	0.34	-0.04	0.34	
授業実施への不安	33. まだダンス授業をどのように行ったらよいかわからない	-0.29	0.85	0.09	-0.09	0.18	0.78
	34. 単元全体の授業ができるか	0.08	0.76	-0.13	0.08	0.02	0.60
	36. 生徒がうまく動いてくれるか	0.14	0.74	0.04	0.03	0.06	0.64
	39. 自分が踊れないことへの不安	0.14	0.73	-0.10	0.08	-0.28	0.63
	38. 生徒に対する助言や言葉がけ	0.00	0.72	0.21	-0.15	-0.31	0.62
	35. 単元全体を組み立てられるか	-0.02	0.68	-0.09	0.22	0.09	0.56
	37. 異性の生徒への指導	-0.02	0.55	0.45	-0.15	0.07	0.59
授業実施への手立て	19. 動きの特徴を捉えて、感情をこめて踊ることができる	-0.02	-0.27	0.64	-0.04	0.41	0.70
	30. 思い浮かんだイメージや動きをすぐ踊って確かめる	0.22	0.08	0.64	-0.12	0.26	0.76
	29. 学習の課題とその進め方を理解している	0.05	0.09	0.64	0.09	-0.18	0.40
	16. 行き詰った時にはとりあえず動いてみると良い考えが生まれる	0.10	-0.04	0.59	0.04	-0.20	0.39
	24. 課題やテーマに集中して取り組む	0.33	0.05	0.55	0.17	-0.07	0.65
	10. 様々な学習課題があり、効果的な進め方がある	-0.08	-0.01	0.55	0.20	0.16	0.39
	8. 身近なものがダンスの教材になる	-0.08	-0.16	0.52	0.35	-0.21	0.43
	20. 仲間と呼吸を合わせて踊ることができる	-0.07	0.06	0.45	0.40	0.09	0.43
	32. 良い動きや表現を感じ取り、共感する	0.23	0.13	0.43	0.01	0.31	0.58
	17. 自分なりのイメージにふさわしい動きで表現できる	-0.02	0.18	0.41	0.15	0.19	0.35
ダンス表現の手立て	15. アイディアを出し合うとおもしろい表現ができる	0.00	0.10	-0.08	0.67	0.33	0.58
	14. 先生が楽しそうにやっていると生徒も楽しくできる	-0.05	0.12	0.14	0.54	0.09	0.38
	7. 簡単な動きでもダンスになる	0.03	-0.10	0.21	0.51	-0.15	0.34
	11. 動きにメリハリをつけることでよりダンスらしい動き方になる	-0.11	-0.03	0.15	0.46	0.34	0.34
感覚運動	12. 繰り返し活動しているうちに「恥ずかしい」という気持ちがなくなる	0.06	-0.25	-0.05	0.19	0.76	0.64
	13. 思っていたより運動量が多く、全身の筋肉を使う	0.08	0.15	-0.01	-0.01	0.49	0.30
	因子寄与	6.72	4.65	6.23	3.27	3.26	24.13
	因子寄与率	26.96%	11.37%	5.27%	4.89%	4.74%	53.23%
	因子間相関						
	I		0.11	0.44	0.27	0.25	
	II		-	0.19	0.20	0.07	
	III			-	0.15	0.26	
	IV				-	0.02	
	V						



表3-2 ダンス授業に対する女子学生の主観的学習評価の因子構造

	項目	因子					共通性
		I	II	III	IV	V	
授業実施への不安	34.単元全体の授業ができるか	0.89	-0.12	0.17	0.06	0.06	0.74
	35.単元全体を組み立てられるか	0.75	-0.21	-0.04	0.05	0.20	0.62
	38.生徒に対する助言や言葉がけ	0.74	0.27	-0.13	-0.02	-0.02	0.64
	33.まだダンス授業をどのように行ったらよいかわからない	0.71	-0.17	0.18	0.18	-0.35	0.66
	39.自分が踊れないことへの不安	0.52	0.06	0.00	-0.03	-0.37	0.44
	36.生徒がうまく動いてくれるか	0.46	0.17	-0.21	-0.09	0.43	0.45
授業構成の基本的知識	13.思っていたより運動量が多く、全身の筋肉を使う	-0.02	0.84	-0.03	0.15	-0.10	0.72
	10.様々な学習課題があり、効果的な進め方がある	-0.12	0.69	0.19	-0.04	0.07	0.68
	25.誰とでも気軽にかわる	0.10	0.64	0.06	-0.09	0.09	0.46
	9.ダンス授業の活動の進め方	-0.14	0.62	0.11	0.13	0.02	0.57
	26.努力してアイデアを出し合う	0.13	0.54	0.16	0.08	0.05	0.42
	11.動きにメリハリをつけることでよりダンスらしい動き方になる	-0.06	0.53	0.01	-0.15	0.00	0.27
より良い授業への態度	24.課題やテーマに集中して取り組む	-0.08	0.10	0.84	0.01	-0.12	0.78
	23.関心を持ってダンスのことを知ろうとする	0.04	0.17	0.71	-0.09	0.14	0.63
	28.自分の役割や学習上の約束を守る	0.15	0.00	0.66	-0.13	0.19	0.46
	32.良い動きや表現を感じ取り、共感する	0.03	0.05	0.60	0.29	-0.01	0.56
	29.学習の課題とその進め方を理解している	-0.12	0.19	0.57	-0.09	0.16	0.55
原初的な身体表現の理解	5.自分で考え自由に表現できる	-0.22	-0.19	-0.04	0.84	0.12	0.81
	6.いろいろな表現がみられる	0.40	0.07	-0.06	0.77	-0.02	0.64
	4.踊っているうちに気持ちが開放的になる	-0.08	0.22	-0.26	0.71	0.18	0.64
	30.思い浮かんだイメージや動きをすぐ踊って確かめる	-0.25	0.22	0.33	0.53	-0.02	0.81
表現の理解と探求	3.いろいろな人と触れ合うことができる	0.15	-0.11	0.14	0.53	-0.04	0.30
	7.簡単な動きでもダンスになる	0.08	0.18	0.03	0.04	0.72	0.64
	18.精一杯に体を動かして表現できる	0.11	-0.09	0.27	0.24	0.65	0.65
	19.動きの特徴を捉えて、感情をこめて踊ることができる	-0.40	-0.17	0.22	-0.12	0.52	0.53
	17.自分なりのイメージにふさわしい動きで表現できる	-0.29	-0.06	-0.05	0.28	0.51	0.49
	8.身近なものがダンスの教材になる	0.13	0.32	0.07	-0.09	0.49	0.45
	20.仲間と呼吸を合わせて踊ることができる	-0.01	-0.03	0.39	0.06	0.42	0.41
	因子寄与	4.10	4.74	4.88	3.73	3.81	21.26
	因子寄与率	26.52%	11.28%	7.90%	6.12%	5.39%	57.21%
	因子間相関						
	I	-	-0.10	-0.27	-0.20	-0.13	
	II		-	0.37	0.22	0.32	
	III			-	0.32	0.23	
	IV				-	0.16	
	V					-	

#### 4. 考察

本調査における各評価項目に対する回答は、学生がダンスの授業を通してどのくらい評価項目に関する内容を理解できたと感じているかを判断するものであり、実際にできる程度は判断できない。しかし、学校体育におけるダンス授業ができるようになることを目的とした本授業を受講した後に感じる事柄は、教員としてダンス授業に向かうための素地になるとも考えられる。そのような意味で、本調査における学生の主観的な学習評価は興味深く捉えられる。

#### 4-1 各評価項目における男女差

各尺度の回答水準平均値と標準偏差をみると、男女ともに「楽しさ・面白さの体験」尺度、「なるほど・わかった」尺度、「身に付いた」尺度では「そう思う」「ややそう思う」の回答比率が高くなった。ダンスおよびダンス授業評価に関する多くの報告（國本，2014、木山，2014、内山ら，2015、佐分利，1997）では、生徒、学生の技能、態度もしくは技能的、知識的理解等の自己評価は肯定的であり、女子の方が男子よりもその傾向が強い。本研究も類似の傾向を示した。一方で、「授業実施への不安」尺度では不安に対して「そう思う」「ややそう思う」回答水準が多くなり、自分自身が授業実施をすることについてはネガティブな捉え方をしていることが明らかになった。これについては、どちらかという現職教員がダンス授業に対して抱く感情と類似している。

平均値が男女で0.2以上離れた項目について検討したところ、「楽しさ・面白さの体験」尺度の「5. 自分で考え自由に表現できる」、「6. いろいろな表現がみられる」で女子の評価が高く、ダンス学習の根底にある「違いがあるから面白い」（村田，2008）という特性や表現することの面白さは女子において理解が深まりやすいと考えられる。また「なるほど・わかった」尺度の「8. 身近なものがダンスの教材になる」「14. 先生が楽しそうにやっていると生徒も楽しくできる」からは、ダンスにおける教材に対して、女子はより幅広い視野で捉えることができることが推察される。また、教員の授業行動の影響を受けやすいのは男子よりも女子であることが示された。伊藤ら（2002）が中学、高等学校のダンス授業について検討した結果では、教師の運動参加は生徒の授業評価にプラスの影響を与える教師行動であることが明らかにされている。大学生においても、特に女子を対象とする場面では教師がダンスを教授することを楽しむ姿勢が学生の学習効果を高めることにつながると考えられる。「身に付いた」尺度の「20. 仲間と呼吸を合わせて踊ることができる」「25. 誰とでも気軽にかかわる」については、良い仲間関係を基調とした仲間との同調や息を合わせて踊ることができたという実感が評価を高めたと考えられる。また、「29. 学習の課題とその進め方を理解している」では、「授業実施への不安」尺度で男子が女子よりも不安度が高くなったことにもつながるものと考えられる。

一方で、「12. 繰り返し動いているうちに「恥ずかしい」という気持ちがなくなる」「16. 行き詰った時にはとりあえず動いてみると良い考えが生まれる」では男子の方が高い評価になった。男子の活動では運動感覚を捉えることがダンス学習への理解を深めることにつながると考えられる。また、「9. ダンス授業の進め方」でも男子が高い評価をしていた。しかし「授業実施への不安」も同時に高いことから、男子ではダンス授業の流れや構成について理解できていることが授業実施への不安を軽減するものではないという構図があると推察される。「23. 関心を持ってダンスのことを知ろうとする」においてもわずかに男子が高く、ダンスは女性が行うスポーツであるという認識はなくなっていることが示された。全体的に女子において評価が高くなったことは、これまでのダンス履修経験の違いにより、ダンス授業の実践イメージが形成できたか否かが一つの要

因となっている可能性がある。

#### 4-2 男女における主観的学習評価の因子構造の違い

男女の主観的学習評価構造をみると、「授業実施への不安」因子に共通点が見られたが、その他の因子構造は男女で異なるものとなった。

男子の特徴としては、心身の開放、身体的コミュニケーション、自己や仲間の受容、身体運動、身体表現、授業に関する内容など多様な評価項目が第Ⅰ因子（「踊ることの基本」因子と解釈）に含まれた。男子はダンスの授業を始めて受講する学生が多く、そのような場合、まずはダンスの基本となる要素について、心身、コミュニケーション、仲間、運動、表現、授業など多様な視点から捉える傾向があると考えられる。その他では授業実施に関して2因子、表現に関して1因子、運動的感覚について1因子が抽出された。一方女子では、全ての因子が授業実施に関与する因子構造を示した。特に「より良い授業への態度」と解釈された第Ⅲ因子は男子には見られないものであり、ダンス授業を行う際に授業態度を重要視する傾向が示唆された。また、第Ⅳ因子については「原初的な身体表現の理解」と解釈した通り、最も基本的なダンスの特性を理解したことが分かる。さらに第Ⅴ因子においてダンス授業での表現の指導の際に重要となる視点を理解したことが示されたといえよう。

内山ら(2015)はリズムダンスの学習において、男子のダンス好感度を高めるには身体的有能感の向上が重要であると述べている。また東原ら(1991)は、中学生の男女共修創作ダンスの授業終了時において「律動運動」と「鑑賞」について男子の方が楽しさの程度が高く、新たに「達成(創る)」についても男子の方の楽しさの程度が高いことを明らかにしている。本研究の結果から、これらの視点は大学生においても大きくは異ならないと考えられる。したがって、男子のダンス学習を効率よく深めるためには身体運動感覚に働きかける指導を行うとともに、仲間との協同作業の中で達成感を味わうことができる指導をすることが有効ではないだろうか。一方で、女子においては、ダンスの特性、ダンス授業に必要な技能、知識、態度についての因子がみられることから、中学校や高等学校の体育授業においてダンスを教えることを具体的にイメージして受講していたのは女子だと推察できる。

ダンス授業実施に対して女子が男子よりも具体的イメージを持つことができる要因として、ほとんどの女子が自らの中学、高校時代にダンス授業の履修経験があることが考えられる。男子では、大学入学までのダンス授業経験が少ない者が多く、生徒を対象にしたダンス授業のイメージを持つことができない可能性もある。ダンス履修経験が本研究における性差の出現に影響していることは否定できない。本研究では、これらの経験も含めて性差とした。これは、本研究の限界である。さらに、本研究は非常に限られた対象における調査であるため、この結果が、ダンス授業にみられる特有の傾向かは今後も継続した検討が必要である。

## 5. 結論

本研究では、保健体育教員養成課程における学生のダンス授業における主観的な学習評価の性差について質問紙調査により検証した。その結果、ダンス授業を受けた学生はダンスおよびダンス授業について比較的肯定的な学習評価を持つことが示され、特に女子においてその傾向が強くなった。また、自分自身が授業実施をすることについてはネガティブな捉え方をしていることが明らかになり、現職教員がダンス授業に対して抱く感情と類似していると考えられた。男女における学習評価構造の因子分析の結果、男子では、「踊ることの基本」因子、「授業実施への不安」因子、「授業実施への手立て」因子、「表現を引き出す手立て」因子、「運動感覚」因子が抽出された。女子では、「授業実施への不安」因子、「授業構成の基本的知識」因子、「より良い授業への態度」因子、「原初的な身体表現の理解」因子、「表し方の理解と探求」因子が抽出された。男子ではダンスそのものへの理解、運動的感覚についての因子構造が特徴として示された。女子ではダンスの技能、知識、態度の観点の因子構造が見られ、ダンスを教えることを具体的にイメージしていたことが示された。

## 参考文献

- 東原芳美, 東川口千代, 中村なおみ, 1991. 男女共修によるダンス授業に関する研究—ダンスにおける楽しさの変容を中心に—. 筑波大学体育科学系紀要 14: 85-97.
- 伊藤美智子, 林信恵, 2002. 教師行動と生徒による授業評価から見たダンス授業の検討. 体育学研究 47: 333-346.
- 伊藤美智子, 岡澤祥訓, 林信恵, 北島順子, 2000. ダンス授業における教師行動に関する研究: ダンス授業と他の体育授業との比較. 大阪体育大学紀要 31: 9-17.
- 木山慶子, 2013. 教員養成におけるダンスの授業改善—学生による授業評価とダンスを苦手とする学生の変容から—. 群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編 49: 93-103.
- 國本真由子, 2014. 体育授業における舞踊教育の一考察—コンテンポラリー・ダンスを踏まえて—. 法政大学スポーツ研究センター紀要 32: 25-34.
- 熊谷佳代, 中川裕紀子, 2014. 岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状と課題, 岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究 16: 21-28.
- 松本富子, 中村なおみ, 小林峻, 2013. ダンス指導法実技研修にみる現職教育の成果に関する検討. 群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編 48: 105-117.
- 村田芳子, 2008. 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?—学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ—. 体育科教育 56(3): 14-18.
- 中村恭子, 2009. 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容—平成19年度、20年度、21年度および24年度の年次推移から—. 日本女子体育連盟学術研究 26: 1-16.
- 佐分利育代, 1997. 教員養成におけるダンス教育の課題. 鳥取大学教育学部研究報告教育科学 38(2):

381-390.

- 茅野理子, 2013. 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について－ダンス必修化に関するアンケート調査から－. 宇都宮大学教育実践総合センター紀要 36: 25-32.
- 高橋和子, 2008. なぜいま「ダンス必修化」なのか?. 体育科教育 56(3): 20-23.
- 内山須美子, 大島智子, 2015. 中学生の男女共修による現代的なリズムのダンスの実践的研究－ダンスの好感度・有能感・楽しさの分析－. 白鷗大学論集 29: 17-50.
- 山崎朱音, 2013. ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方: 静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して. 静岡大学教育実践総合センター紀要 21: 73-81.
- 吉川京子, 1996. 中学校・高等学校におけるダンス指導の現状と課題. 金沢大学教育学部紀要・教育科学編 45: 97-107.
- 全国ダンス・表現運動授業研究会編, 2011. 明日からトライ! ダンスの授業. 大修館書店